

一八世紀南ウクライナの植民と ザポロージエ・カザーク

中 村 仁 志

【要約】 本稿では、一八世紀に進展した南ウクライナへの入植が、ロシア南部辺境の半独立勢力であったザポロージエ・カザークの対応との関連において分析された。ロシア国家は、一八世紀、外国人入植者の導入、ノヴォロシア県の設立等の施策を通じ南ウクライナ北部への入植をおしすすめていった。この過程で、南ウクライナのもとの住民であったザポロージエ・カザークに対し、彼らの支配領域たるヴォーリノスチを蚕食しつつ拡大された北部入植地を守る代償として他のカザークに比して大きな自由の余地が許容された。しかし、一七六〇年代末よりザポロージエ・カザークは、北部入植地の住民を連れ去り、これを農業労働力として利用することにより、ザポロージエの農業発展、経済的自立をはかる。ここにいたり、ロシア政府とザポロージエ・カザークの利害の対立は決定的なものとなり、一七七五年、後者の本営セーチは廃絶の憂き目を見た。

史林 六九卷六号 一九八六年一月

はじめに

ユーラシア大陸を東西に貫くステップ草原は、遊牧民族が歴史の舞台に登場して以来、彼らの支配地域であり、また移動路でもあった。古来、多くの遊牧勢力がステップ地域に興亡し、その中のあるものは、遠くヨーロッパにまで侵寇した（フン、アヴァール、ブルガール、ペチエネグ、マジヤール、クマン、モンゴル等）。

しかし、火器の出現、普及とともに、ステップの西部、黒海北岸からドナウ河畔にかけての地域においては、遊牧民族

は、しだいに農耕民に支配者の座を明け渡さざるをえなくなる。マクニールによれば、ヨーロッパのステップ境界といふべきこの地域でかかる勢力交替の過程が進んだ時期は、一五〇〇—一八〇〇年の間である。わけても一七四〇—一八〇〇年は、その最終段階にあたるという^①。この最終段階において、ステップ境界をみずからの農業植民地として取り込むべく、オーストリア、オスマン・トルコ、ロシアの三帝国が争った。結局、三国の中でもっとも大きな成功をおさめたのは、ロシアである。一八世紀後半、ロシアは黒海北岸ステップの支配権を賭けたトルコとの戦いに最終的な勝利を博しつつ、南ウクライナの農業植民地化をおしすすめていく。

ヨーロッパ・ステップの農業植民地化、すなわちステップ境界の消滅は、また、かの地に割拠した群小勢力の運命にも大きな影響を及ぼす。かつてステップ境界では、トランシルヴァニア、モルダヴィア、ヴァラキア、ザポロージェ・カザーク、クリミア汗国などの諸勢力が、トルコ、ポーランド、ロシア、オーストリアといった近隣の大国を宗主として戴きつつ、内政における一定の自治、半独立の立場を保っていた。この自立性を支えたものは何か。大国間のはざまに位置するステップ境界の勢力均衡の場としてのありよう、これである。しかし、一八世紀の後半にいたりステップ境界が消滅するとともに、これら群小勢力も近隣の大国に対する自立性を失っていかざるをえない。ザポロージェ・カザーク、クリミア汗国の支配領域が、一七七〇—一八〇〇年代、あいついでロシア帝国の一地方に転化していったのは、そのもっとも顕著な例であろう。

本稿は、一八世紀ステップ境界におけるこうした全般的な状況の変化を念頭におきながら、この過程の典型ともいえるべきロシア国家の黒海北岸への南下、南ウクライナの植民について考察することを目的としている。その際、具体的な研究対象となるべき南ウクライナ北部の入植地とその南部に位置したザポロージェ・カザークに関し、これまでの研究における問題点を指摘し、あわせて筆者のよってたつ視座を明らかにしておきたい。

まず、南ウクライナ北部の入植地の研究について。該地への入植の歴史に関しては、つとに一八三〇年代、スカリコー

フスキーによって先鞭がつけられて以来、人口動態、経済開発、入植者の社会的、民族的構成の変化等を中心に多大な研究成果が蓄積されてきた。^③ とりわけ、ソヴェト期の人口史家カプザンによる寄与はいちじるしい。

ただ、従来の南ウクライナ北部入植史の研究にあっては、入植地の南に隣接するザポロージェ・カザークとの関係が不明なまま残されてきた。この点がなぜ問題にされるべきかといえば、北部入植地をも含めた南ウクライナのほぼ全域が、もともとヴォーリノスチと呼ばれるザポロージェ・カザークの支配領域であったためである。南ウクライナの北部は、一八世紀、ロシア政府によりカザークの手から奪われ、入植地へと姿を変えていく。一方、南ウクライナの南部には、領域の縮小をよぎなくされながらもカザークが存在しつづけた。それゆえ、一八世紀に関しては、北部入植地とザポロージェ・カザークを、別々の存在ではあるが、同時に南ウクライナという統一体を構成するものにとらえ、そのうえで両者の関係を明らかにするという視点があつてしかるべきかと思われる。ところが、従来の入植史研究においては、こうした視点はほとんどみあたらない。

たとえば、スカリコフスキーであるが、彼は北部入植地を含むノヴォロシア地方の植民と一八世紀ザポロージェ・カザークとを対象とした研究を、それぞれ別個に出している。^④ ロシア政府の直接の支配下にあつた入植地と一八世紀にいたつても、なおかなりの自立性を保つたザポロージェ・カザークとの差異はあまりに大きい、おのおの独立した研究対象とせざるをえない、というわけである。

こうしたいわば「分離主義」の対極に位置づけられるのが、カプザンの研究^⑤である。そこでは、ザポロージェをも含めた黒海北岸地域が対象とされるが、それは北部入植地とザポロージェ・カザークとの社会構造、行政上の立場等の差異を捨象したうえで、人口数の変動のみを追うことによって可能となっている。人口史の立場からいえば、それでもかまわないのかもしれないが、いささかことを単純化しすぎている、といわざるをえない。

つまるところ、これまでの南ウクライナ北部入植史の研究では、入植地とザポロージェ・カザークとの差異が過大視さ

れるか無視されるかの極端にはしる傾向があった。いずれにせよ、両者を関係づけてとらえるという視点ではない。

つぎに、ザポロージェ・カザークに関する研究史^⑥に目を転じてみよう。帝政期よりソヴェト期にかけて進められたザポロージェ・カザーク史研究の核を一言であらわせば、どうなるか。それは「カザークの自由」をめぐる議論に収斂させられるであろう。つまびらかにいえば、帝政期には、ツァリーズムの専制原理に対する民会的原理の具現としてのカザークの自由、大ロシアの併合主義に抗する小ロシア（ウクライナ）の自立性の最後の拠り所としてのザポロージェの自由が論議された。これに対し、ソヴェト期にはいると、階級闘争史観の立場より、農奴制に代表される封建的抑圧に対する民衆的抗議形態の一環としてのカザークの自由がとりざたされる。

ただ、いずれの立場にせよ、一八世紀がザポロージェ・カザークの自由の最後の輝きの時期であった、という点で研究者の見解は一致する。さらに、カザークの土地を蚕食しながら拡大された北部入植地こそが、カザークの自由に対するロシア政府の侵害の先陣となった、という点についても。つまり、従来のザポロージェ・カザーク史研究においては、北部入植地は、もっぱらカザークの自由に対する敵役という役まわりをあてがわれてきたわけである。

一八世紀、南ウクライナ北部の入植地と南部のザポロージェ・カザークが、土地をめぐる相反する利害関係にあったのは事実である。とはいえ、南ウクライナの南北の敵対ばかりをいいたてて、それでよしとする態度は、はたして正鵠を射たものといえるであろうか。

結局、北部入植地とザポロージェ・カザークのいずれについての研究史においても、両者の関係は、南ウクライナというひとつの場を構成する要素間の関係としてはとらえられてこなかった。北部入植地とザポロージェ・カザークの差異、敵対を指摘すること自体は、誤りではない。しかし、その差異、敵対を認めただうえで、なお、両者を南ウクライナの中で一種の役割分担ないし相互補完の関係にあったもの同士としてとらえれば、事態はどう理解されるか。本稿において筆者が試みたのは、こうした視座の導入によって南ウクライナ史研究にあらたな光をあてなおすということに他ならない。

以下、この問題提起に答えるべく、まず、一八世紀における南ウクライナ北部への入植の進展とザポロージェ・カザークの対ロシア政府関係について概観し、その後入植地とカザークの關係の把握につとめるとしよう。

① William H. McNeil, *Europe's Steppe Frontier, 1500-1800. A Study of Eastward Movement in Europe, 1964*, pp. 182-221.

② 本稿で考察の対象となっている黒海北岸地方の名称については、A 北方の左岸、右岸ウクライナと対をなすウクライナの一部分としての南ウクライナ、B 一八世紀にあらたにロシア帝国の辺境として組み込まれたノヴォロシア(新ロシア)、C ザポロージェ・カザークの伝統的な支配領域たるヴォーリノスチ、と三様の言い方が可能である。本稿においては一八世紀に限らず、その前後の時代にも適用できるという理由から南ウクライナの語を主に用いるが、他の名称についても適宜、使っていくとした。

③ 南ウクライナ植民に関する研究史については、B. M. Кабыан. За-селение Новороссии (Екатеринославской и Херсонской губерний)

一 南ウクライナの植民

黒海の北岸、クリミヤ半島の北方には広大な南ウクライナの平原がひろがる。一八世紀、ここはノヴォロシアの名で呼ばれるロシア帝国の辺境地域となった。北方で左岸(ドニエプル河東岸)ウクライナ、北東でスロボトスカヤ・ウクライナ、東方でドン・カザーク領等、ロシア領に連なっていた南ウクライナは、その一方、北西でポーランド領右岸(ドニエプル河西岸)ウクライナ、南方でクリミヤ汗国、ノガイ・タタールの遊牧地、南西でオスマン・トルコ領に接していた。文字通り、ロシア帝国の西南に突き出た前哨というべき位置にあったわけである。

南ウクライナの開發、植民については、帝政期よりスカリコーフスキー^①、バガレーイを代表的研究者として、ソヴェト

в XVIII-первой половине XIX века (1719-1858 гг.), М. 1976 (За-селение и略), с. 5-24 参照。など、特に重要な研究として、次章註①②③④。

④ А. А. Савьяковский. Хронологическое обозрение истории Новороссийского края 1730-1823, ч. I-II. Одесса, 1836-1838; Он же. История Новой Сечи или последнего коша Запорожского, ч. I-II. Одесса, 1886 (название третье).

⑤ В. М. Кабыан. Заселение.

⑥ 一八世紀のザポロージェ・カザークに関する研究については、B. O. Голобуцкий. Запорожская Сечь в останиі часи свого існування (1734-1775). К., 1961 (Запорожская и略), с. 5-54 参照。

期にはいつてからも、ポロンスカヤ・ヴァシレーンコ（ポロシカ・ヴァシレーンコ）^③、カプザーン^④によって研究が進められてきた。この研究史の上で帝政期の研究とソヴェト期のそれとを分かつメルクマールをいくつかあげるならば、まず第一に外国人移住者の意義をめぐる評価の相違があろう。帝政期には、セルビア人、モルダヴィア人等の外国人移住者が南ウクライナ入植史上はたした役割に対し「不当に大きな注意」^⑤が向けられてきた。これに対し、ソヴェト期の研究では、ウクライナ人、ロシア人の国内移住が、入植の主力として前景にあらわれてくる。

植民史研究の基礎となるべき人口統計の数値についても、帝政期の研究が不十分である旨、ソヴェト期の研究者の側から指摘されている。カプザーンによれば、スカリコーフスキーがあげたノヴォロシアの人口統計の数値のうち、一七八二年前以前に関するものは、はなはだ不完全であるという^⑥。その原因として、まず人口調査資料の不備があげられている。一七一九年から始まる人口調査の記録を利用できる他地域とは異なり、ノヴォロシアにあつては一七八〇年代にはいってようやく全住民を対象とする人口調査がおこなわれるようになった。また、ノヴォロシアは、数次にわたるロシア・トルコ戦争の結果、漸次（一七三九、七四、九一、一八二二年）ロシア領に編入された地域である。ロシア国内の行政区画としても数度の変遷を経、長く地理的範囲が一定しなかった。これも、かの地の人口数の推計を困難にしてきた背景としてみのがせない。

くわえて、一八世紀の南ウクライナが明瞭に異なる二つの地域——北部入植地と南部のザポロージェ・カザーク領——から成り立っていたことも、植民史研究の事情を複雑なものにしてきた。南ウクライナは、元来ヴォーリノスチと呼ばれるザポロージェ・カザークの支配領域であつた。しかし、北方戦争のさなか、カザークがマゼーパの対ロシア反乱に加担したことから、この地域の歴史は大きな転換点を迎える。ザポロージェ・カザークは、一七〇九年、本拠地であるセーチをロシア軍に破壊され、トルコの属国であるクリミア汗国の領内に移り住むはめとなつた^⑦。さらに、これを追うように、一七一一年のピョートル一世の対トルコ遠征の失敗に際して結ばれたブルト条約により、ヴォーリノスチもトルコ領に

編入されることとなる。ロシア領南ウクライナの消滅である。このような事態が二〇年あまりつづいた後の一七三四年、ザポロージェ・カザークは、ロシアの支配下へと復帰した。また、ヴォーリノスチも一七三五―一七三九年のロシア＝トルコ戦争の結果、ロシアに返還される（ベルグラード条約）。

一八世紀のヴォーリノスチは、かくしていったんはカザークとともにロシアの手から離れ、再び戻るといふ複雑な軌跡をたどった。このヴォーリノスチの北部をいわばカザークの手から奪いとるかたちで進められたのが、南ウクライナの植民である。以下、植民史の概要を、その性格の変化にもとづき、(一) 一七三一―一七五一年、(二) 一七五一―一七六四年、(三) 一七六四―一七五五年の三期に大別した上で述べていこう。

(一) ヴォーリノスチ北部への入植は、すでに一七世紀の末よりみられる。ただ、一七二〇年代の終りごろまでは、植民の流れは、まだ大したものではない。入植が本格化するのは、ようよう一七三四年のザポロージェ・カザークのクリミヤ汗国からの帰還の前後からである。^⑧その先駆けともいふべきが、ドニエプル河の左岸（東岸）、ヴォーリノスチの北東部に一七三一年からはじまったウクライナ・ライン（要塞線）の建設である。ウクライナ・ラインは、対トルコクリミヤ汗国用の防壁として、北ドネツ河からドニエプル河にかけ、オリョール河沿いに設けられ、全長は二六九ヴェルスタ（二八七キロメートル）にもおよぶ。この長大なライン地域の守りに就くべく、近隣諸県から呼び集められた郷士（オドノドヴォーレツ）が入植した。^⑨その数は、一七四〇年には六一六七名（男子）に達す。さらに、四五年には郷士一万一八〇一名に、その他の国有地農民六四三名を加え、計一万二四四四名（男子）を数えるまでになる。^⑩

一方、ドニエプル河右岸（西岸）の「ザドニエブルの地」（ザドネーブルスキー・メスター）と呼ばれる地域への入植も進められていく。ヴォーリノスチ北西部にあたるこの地域への入植は、すでに一八世紀初頭よりはじまっており、ザポロージェ・カザークの亡命中も、ポルタヴァ、ミールゴロド両連隊区（ポルク）の出身者を中心に、ロシア領左岸ウクライナからの移住者の波がとだえなかった。^⑪その結果、一七三五―一七三九年のロシア＝トルコ戦争の前までに、約二〇〇〇名

（男子）のカザーク、農民が住みついていた。戦争の間、住民は一時、左岸ウクライナに避難したが、戦後、再び入植が進み、一七四五年にはカザーク約四八〇〇名、農民約四九〇〇名の計九七〇〇名（男子）を救えるにいたる。^⑬ 入植の主体となったのは、先にあげた両連隊区の出身者をはじめとするウクライナ人である。また、かの地の社会構成の特徴として、六〇年代なかばまで農奴が存在しなかったことを指摘しておきたい。

(二) 一七五一―一七四四年は、南ウクライナ史上、いわゆる「セルビア人入植の時代」として知られる。呼び名の由来となつたのは、オーストリアからのセルビア人の集団移住である。オーストリア領南ハンガリーには、一七世紀の末葉より、トルコ領からのがれてきたセルビア人が住みついていた。彼らは、かの地でハプスブルク皇帝直属の辺境防衛用軍事コロニーを形成したが、マリア・テレジアの治世下の一七四〇年代、ハンガリー貴族の支配下に移されることとなる。^⑭ その際、これを嫌った一部のものが、ロシアのツァーリに臣従を願い出た。^⑮ この願いを受け入れたロシア政府は、南ウクライナ北西部の「ザドニエプルの地」にノーヴァヤ・セルビア（一七五一年設立）、北東部のウクライナ・ラインの南にスラヴァノ・セルビア（一七五三年設立）と名づけた入植地を設け、上述のセルビア人をはじめとする外国出身の（＝ロシア人、ウクライナ人以外の）ギリシア正教徒スラブ人を移住させた。^⑯

と同時に、それ以前に「ザドニエプルの地」に移り住んでいたウクライナ人には、外国人入植者に土地を譲るべく元の居住地へ立ち退くようにとの命が出る。^⑰ ところが、この措置に反発したウクライナ人のポーランド、ザポロージェへの逃亡があいついだため、政府は、これに歯止めをかけるべくウクライナ人用の代替入植地の設立をはかった。一七五四年、ノーヴァヤ・セルビアの南方さらに二〇ヴェルスタ（二一・三キロメートル）にわたって設けられたノヴォスロボトスキ・カザーク連隊区が、それである。^⑱ こうして成立した三つの入植地は、ロシア帝国一般の地方行政組織に組み込まれることなく、特殊な軍管区として元老院、陸軍省の直接の管轄下におかれた。^⑲

以下、各々の入植地について植民の過程をあとづけていくと、まず、ノーヴァヤ・セルビアでは一七五四年より外国か

らの移住が本格化する。一七五四年十二月に三九一九（うち男子二二二五）名を数えたノーヴァヤセルビアの人口は、五七年はじめに五四八二（同三〇八九）名、六一年一万一一七九（同六三〇五）名と増大していく^②。その際、注目されるべきは、外国人入植者中、セルビア人の占めた割合の低さである。たとえば、一七五四年十二月の男子人口二二二五名中の圧倒的多数は、一六七六名（七五・三パーセント）を数えたヴァラキア人によって占められており、セルビア人の数は、わずかに二五七名（一一・六パーセント）にすぎない^③。これは、トルコを刺激するのを恐れるオーストリア政府のセルビア人引き止め策によるものであった^④。その結果、ノーヴァヤセルビアは、セルビア人の申し出によりできたヴァラキア人の入植地という体を示す。

旧「ザドニエプルの地」ノーヴァヤセルビアへの外国人の流入と並行し、その南方にかの地を追われたウクライナ人の受け入れ先として設けられたノヴォソロボトスキー・カザーク連隊区においても、人口の増加はめざましい。一七五四年十一月に七六七一名であった同地の男子人口は、五七年一月一万一一〇三名、五九年一月一万四二二〇名、六三年一月には一万九六四五名を数えるまでになる^⑤。

つぎに、南ウクライナ北東部に外国人向け入植地として設けられたスラヴァノセルビアに目を移すと、ここでも一七五五年なかばにわずかに一一〇一名であった男子人口が、六三年には一万七六名と九倍強の人口増を記録した。ただ、ノーヴァヤセルビアの場合とは異なり、スラヴァノセルビアの人口増の主因は、外国人入植ではなく、それを補うべく受け入れられたウクライナ人移住者の流入に求められる。一七六三年の男子人口一万七六名のうち外国人入植者は、四割弱の三九九二名にすぎなかった（その大半は、ノーヴァヤセルビアの場合と同じくセルビア人でなく、二六二七名を占めたモルダヴィア人）。残る人口の大部分は、ウクライナ人から成っていたのである^⑥。

新規に設けられた三つの入植地における人口増とは対照的に、一七三〇年代より郷土が住みついていたウクライナ・ライナ地域は、人口の停滞を特徴とする。一七四五年の第二回人口調査時の男子人口一万三一九名から六二年の第三回人

口調査時の同一万二六九二名という動きが、それである。ウクライナ・ラインの人口増を妨げた原因としては、一七五二年の凶作、苛酷な負担に耐えかねた郷士の逃亡などをあげることができであろう。

かくして、いわゆる「セルビア人入植の時代」にも南ウクライナ北部の植民は進む。しかし、その呼び名にもかわらず、同期の人口増を支えた真の原動力は、ウクライナ人の該地への移住であり、セルビア人入植の意義は副次的なものにとどまったといわざるをえない。ノーヴァヤ・セルビア、スラヴァノ・セルビアで進展した外国人入植にしても、植民運動の主力はセルビア人ではなく、モルダヴィア（ヴァラキア）人によって担われたのである。

(三) このセルビア人入植の事実上の失敗を受けて、ロシア政府は、南ウクライナ植民のあらたな展開をめざした一連の施策をうちだす。方針転換の先触れとなったのは、一七六三年六月十一日の法令である。従来、外国人専用の居住区とされていたノーヴァヤ・セルビアへのロシア人、ウクライナ人の入植を認める、というのが、その内容であった。セルビア人入植政策の破産宣告が、ここに下されたといえよう。

つづいて政府は、一七六四―六五年にかけて入植地の統合再編成をおしすすめていく。この間、ノーヴァヤ・セルビア、スラヴァノ・セルビア、ノヴォスロボトスキー・カザーク連隊区の三入植地にウクライナ・ラインを加え、さらに、それまでヴォロネジ県に含まれていたバフムート郷（ウエースト）、左岸ウクライナの構成員であったポルタヴァ、ミールゴロド連隊区の一部なども併せ、ノヴォロシア県が設けられた。南ウクライナ北部を統合した単一の行政単位の誕生である。しかし、政治的な統合は、当然のことではあるが、そのまま人口動態の一律化につながるものではない。ノヴォロシア県についても、県内の各地域は、それぞれに異なった人口の動きを示す。以下、これを地域別にみていくとしよう。

ノヴォロシア県の諸地域のうち、入植がもっとも集中的に進んだのは、同県の西部、かつてのノーヴァヤ・セルビア、ノヴォスロボトスキー・カザーク連隊区からなるエリサヴェトグラト郡（プロヴィンツィヤ）である。ここへの入植の原動力は、一七六三年六月十一日の法令によりノーヴァヤ・セルビアへの移住を許されるようになったロシア人、ウク

ライナ人の流入であった。一七六四―六五年のみで、五三四名のロシア人——大半（四九九〇名）は分離派教徒——と四一九三名のウクライナ人が入植したという。^②これによってエリサヴェトグラート郡の人口は、一七六四年末の六万一九六（うち男子三万二五七一）名、六七年七万三七六一名、七二年はじめ一〇万七七二八（同六万二二九九）名と増加していく。^③

その間、民族比に関しては、同郡ではさしたる変化は生じていない。一七六五年と七五年の人口についての民族別の内わけを比べてみても、ウクライナ人がともに全体の三分の二（六五年の六五・五パーセントから七五年の六四・九パーセント）を占め、これにモルダヴィア人（同一五・四―一八・五パーセント）、ロシア人（同一二・七―一三・四パーセント）がつづく。^④

変化がみられたのは、社会構成の面、とりわけ農奴数の増加においていちじるしい。それまで農奴の存在しなかったかの地に、一七六五年よりウクライナ人農奴の移住がはじまり、三年後の六八年には男子数六九七〇名に達す。^⑤農奴数の増加はその後もつづき、七二年には二万四九八四（うち男子一万二六一四）名を数えるまでになる。^⑥同期の総人口のほぼ四分の一である。これら農奴人口のほとんどが、エリサヴェトグラート郡の北部、旧ノーヴァヤセルビアの地に設けられた二つの連隊区に住みついた。たとえば、一七七二年の農奴人口のうち、実に九二・八パーセント（二万三一八六名）が北部に集中したという具合に。^⑦

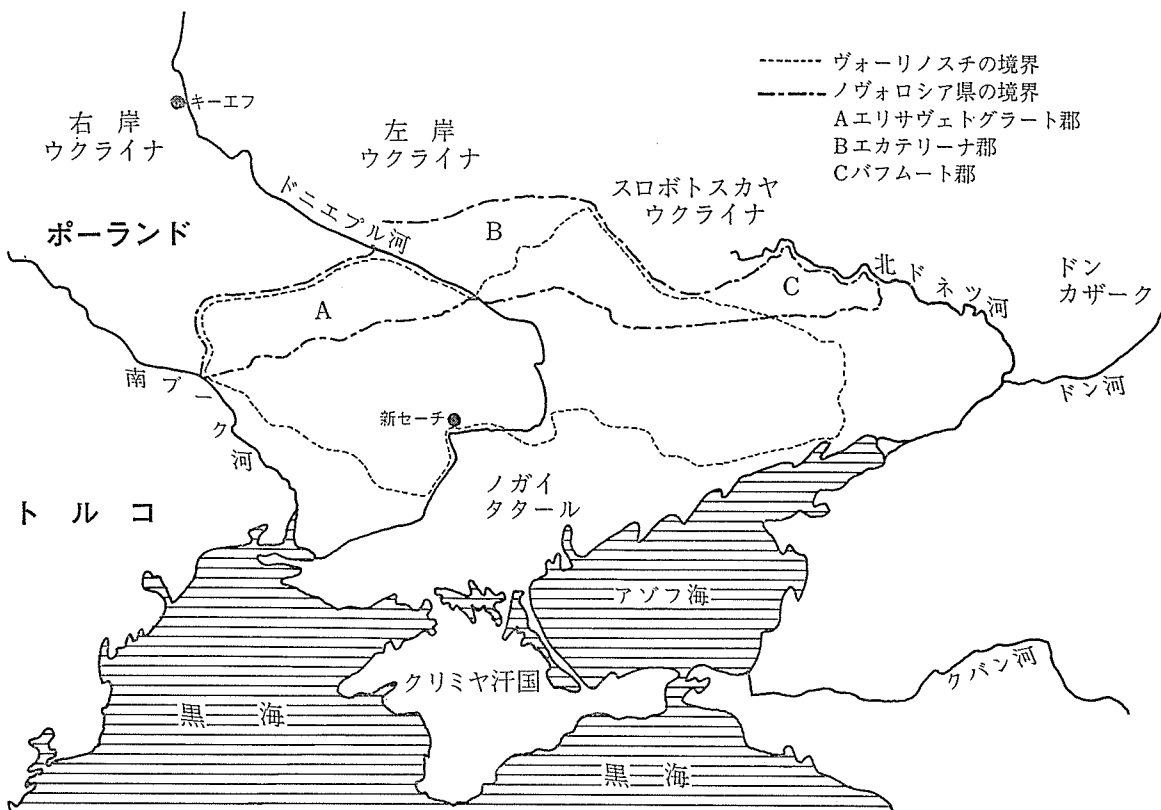
移住者の流入を通じて人口増を達成したエリサヴェトグラート郡とは異なり、ノヴォロシア県東部（ドニエプル河岸地方）においては、近隣のロシア領を合併するかたちで人口規模の拡大がはかられた。ここでは、スラヴァノセルビアが廃された後、二つの行政区画が設けられた。一つは、ウクライナ・ラインに左岸ウクライナのポルタヴァ、ミールゴロド両連隊区の一部、さらにスロボトスカヤ・ウクライナの一部をも併せてつくられたエカテリーナ郡である。同郡は、あらたに合併された地域のウクライナ人を加え、一挙に大人口をかかえることとなった。一七六四年、左岸ウクライナか

ら三万九二二二名、スロボトスカヤ・ウクライナからは五五二六名を得た結果、同郡の男子人口は、それまでの一万三〇七八名から、いちやく五万七八一六名にふくれあがる。これら新加入のウクライナ人は、ドニエプル河、北ドネツ河にそれぞれ沿って設けられたドニエプル槍騎兵連隊区（男子二万七五七六名）、ドネツ槍騎兵連隊区（同一万七一一二名）の構成員となった。

しかし、エカテリーナ郡の人口は、爆発的な拡大の後、停滞減少し、一七七二年には男子数四万六二八三名まで落ちこむ（六四年と比べて一万一五三三名減）。減少傾向は、六〇年代末から七〇年代はじめにかけてのドニエプル槍騎兵連隊区においてとりわけ顕著であった。六七年に二万六一〇八名を数えた同区の男子人口は、七二年には一万七九一二名と、実に八一九六名、三一・四パーセントの人口減を記録したのである。この人口減には、南方のザポロージエ・カザークの動きが密接な関わりを持っているのであるが、それについては後述に譲るとしたい。

エカテリーナ郡とならぶノヴォロシア県東部のもう一つの行政区画は、バフムート郡である。同郡は従来ヴォロネジ県に属していたバフムート郡を中核とし、これにかつてのストラヴァノセルビアの一部からなるバフムート連隊区が併されてきた。バフムート郡の人口史の特徴は、いちじるしい停滞性という点に求められるであろう。ノヴォロシア県設立以前の二七六二年から設立後の六八、七二、七五の各年の人口統計において、バフムート郡に該当する地域の男子人口は、二万五六六〇名、二万四九一四名、二万三四〇三名、二万六七二一名と、多少の上下動はあれ、ほぼ一定の数を示す。

以上が、一七三〇年代はじめから七〇年代なかばにいたるまでの南ウクライナ北部の植民の歴史である。それはまた、裏返していえば、ザポロージエ・カザークの支配領域たるヴォーリノスチの一部が、入植地となるべく政府権力によって蚕食されていった過程に他ならない。ここで試みにヴォーリノスチと北部入植地の面積を比べてみると、一七六八―七四年のロシア・トルコ戦争の前夜のヴォーリノスチの面積は、約八百万デシヤチナ^⑩（八万七千平方キロメートル）。これに対しノヴォロシア県の面積は、約三百万デシヤチナ^⑪（三万三千平方キロメートル）といわれる。ノヴォロシア県の中



には、ハンムート郡のようにもともとヴォーリノスチに含まれていなかった地域もあるが、それを考慮してもヴォーリノスチの五分の一から四分の一ほどがザボロージェ・カザークの手から奪いとられ、北部入植地へと姿を変えた計算になる。かくしてカザークが支配領域の縮小を強いられていったなか、彼らの対政府関係、社会体制のありようには、いかなる変化が生じていたのだろうか。

- ① А. А. Скальковский. Хронологическое обозрение истории Новороссийского края 1730-1823, ч. I-II. Одесса, 1836-1838; Он же. Опыт статистического описания Новороссийского края, ч. I-II. Одесса, 1850-1853.
- ② Д. И. Ватагел. Колонизация Новороссийского края и первые шаги его по пути культуры.—«Киевская старина», т. XXV, 1889, апрель, с. 26-55; т. XXXV, 1889, май и июль, с. 438-84; т. XXXVI, 1889 июль, с. 110-48.
- ③ Н. Полонская-Василенко. Заселение Южной Украины в середине XVIII в.—«Историк-марксист», 1941, № 5, с. 30-46; Н. Д. Полонская-Василенко. Из истории Южной Украины в XVIII в. Заселение Новороссийской губернии (1764-1775).—«Исторические записки», 1942, т. 13, с. 130-74; Н. Д. Полонская-Василенко, 'The Settlement of the Southern Ukraine (1750-1775)', *The Annals of the Ukrainian Academy of Arts and Sciences in the U. S.* vol. IV -V (Summer-Fall, 1955) No. 4 (14)-(15) (ЗІІІ-Settlement' 4 巻).
- ④ В. М. Кабузан. Крестьянская колонизация Северного Причерноморья (Новороссии) в XVIII-первой половине XIX в. (1719-1857 гг.).—«Журналник по аграрной истории Восточной Европы», 1964 г., Кутшнев, 1966, с. 313-24; Он же. Заселение.
- ⑤ В. М. Кабузан. Заселение, с. 14.
- ⑥ Там же, с. 7.
- ⑦ トラウマン國の領内と移住した初期のカサリーン・カザークの O. Subtelney, *The Macefists: Ukrainian Separatism in Eighteenth Century*, 1981; Д. И. Эварникский. История запорожских козаков, т. III, СПб., 1897, с. 510-57; А. А. Скальковский. История Новой Сечи или последнего коша Запорожского, ч. II, Одесса, 1886 (издание третье), с. 22-46 巻末。
- ⑧ Н. Д. Полонская-Vasylenko, 'Settlement', pp. 25-26.
- ⑨ 戦時空軍軍醫隊の長官として活躍した藤田野矢。フナトノキヨシ。移住した戦士の記録は O. Subtelney, M. D. Рабинович. Положение однопольцев, переселенных в 30-50-е годы XVIII в. на Украинскую пограничную линию. «Проблемы аграрной истории (с древнейших времен до XVIII в. включительно)», ч. I, Минск, 1978, с. 95-102 巻末。
- ⑩ В. М. Кабузан. Заселение, с. 77.
- ⑪ Н. Д. Полонская-Vasylenko, 'Settlement', pp. 22-24.
- ⑫ В. М. Кабузан. Заселение, с. 76-77.
- ⑬ Там же, с. 79.
- ⑭ R. A. Kann and Z. V. David, *The Peoples of the Eastern Habsburg Lands, 1526-1918*, 1984, pp. 181-84, 279.

- ② Политические и культурные отношения России с югославянскими землями в XVIII в. документы. М., 1984, № 102.
- ③ ノーテンキヤ = ヤヌボトの設立問題の報告(1752)『ПСЗ, т. XIII, № 9919 от 24 декабря 1751 г.; № 9921 от 29 декабря 1751 г.; № 9924 от 11 января 1752 г.; № 9985 от 3 февраля 1752 г.; № 9967 от 23 марта 1752 г.; № 10029 от 21 сентября 1752 г.; № 10049 от 20 ноября 1752 г.』
 Контракт = ЯнубоТの設立問題の報告(1752)『ПСЗ, т. XIII, № 10049 от 20 ноября 1752 г.; № 10104 от 29 мая 1753 г.』
- ④ Н. Попов. Военные поселения сербов в Австрии и России. — «Вестник Европы», 1870, кн. 6, с. 604-7; Политические и культурные отношения России с югославянскими землями... № 104-6, 108-10, 115, 122-23, 132, 136, 139, 147; Н. Д. Ролонс'ка-Vasylenko, 'Settlement', pp. 40-50.
- ⑤ ПСЗ, т. XIII, № 9921 от 29 декабря 1751 г.; № 10049 от 20 ноября 1752 г.
- ⑥ N. D. Rolons'ka-Vasylenko, 'Settlement', pp. 63-65, 126-28.
- ⑦ Ibid., pp. 75-76, 102.
- ⑧ В. М. Кабузан. Заселение, с. 88, 90.
- ⑨ Там же, с. 88. ノーウンナヤ = ヤヌビノヤ, 入植者の指導者層の大半がヤヌビノ人から成っていることが意味をなす。ヤヌビノ人の入植地のみならず(Архимандрит Арсений. Софроний Дубровский, архимандрит Нової Сербин.—«Киевская старина», т. X, 1884, октябрь, с. 276-77)。
- ⑩ ヤヌビノ人入植地の設立をめぐっての「キーヌボト」の間の外交問題について H. L. Ducht, New Serbia and the Origins of the Eastern Question, 1751-55: A Hapsburg Perspective, *Russiatz*
- Review*, 1981, No. 1, pp. 1-19; Р. Михнева. Россия и Османская империя в международных отношениях в середине XVIII века (1739-1756), 1985, с. 108-11; Политические и культурные отношения России с югославянскими землями... № 111, 114, 121, 126, 129 参照。
- ⑪ В. М. Кабузан. Заселение, с. 86-87.
- ⑫ Там же, с. 94.
- ⑬ Там же, с. 96.
- ⑭ ПСЗ, т. XVI, № 11861 от 11 июня 1763 г.
- ⑮ ПСЗ, т. XVI, № 12089 от 22 марта 1764 г.; № 12180 от 11 июня 1764 г.; № 12211 от 22 июля 1764 г.; № 12236 от 5 сентября 1764 г.; т. XVII, № 12339 от 26 февраля 1765 г.; № 12367 от 26 марта 1765 г.; № 12376 от 13 апреля 1765 г.
- ⑯ N. D. Rolons'ka-Vasylenko, 'Settlement', p. 256.
- ⑰ Н. Д. Полонская-Василенко. Из истории Южной Украины в XVIII в..., с. 165; В. М. Кабузан. Заселение, с. 104.
- ⑱ Там же, с. 111.
- ⑲ Там же, с. 105.
- ⑳ Н. Д. Полонская-Василенко. Указ. ста., с. 165.
- ㉑ Там же.
- ㉒ В. М. Кабузан. Заселение, с. 116-17.
- ㉓ Там же. 古来ノシロチの住民の輪郭式雜種区への徴税編入について Д. Миллер. Пикниери.—«Киевская старина», т. LXVII, 1899, декабрь, с. 301-22 参照。
- ㉔ Н. Д. Полонская-Василенко. Указ. ста., с. 166.
- ㉕ Там же; В. М. Кабузан. Заселение, с. 116-17.
- ㉖ Там же, с. 113; Н. Д. Полонская-Василенко. Указ. ста., с. 167.

③ A. A. Crankovskii. Osmr carstvennecokoro omecannu Horopo-
cnicikoro kpaui, y. I, c. 210.

④ On ke. Xponofoptичeckoe obozpeuue Horopocnicikoro kpaui..., y.
I, c. 112.

二 ザポロージェ・カザークとロシア国家

ザポロージェ・カザークの歴史は、一七三四年に新時代を迎える。一七〇九年のマゼーパの対ロシア反乱に加盟して敗れて以来、クリミヤ汗国への亡命をよぎなくされていたザポロージェ・カザークは、一七三三年八月三十一日、アンナ女帝の赦しを得、再び、ロシア国家の支配に服することとなった。^①翌三四年、故郷へ帰った彼らは、かつてのセーチ（本営）の所在地より数キロメートル離れた場所に新しくセーチを築く。^②いわゆる「新セーチ期」の幕開けである。新セーチ期のザポロージェ・カザークとロシア国家との関係は、いかなるものであったか。本章では、他のカザーク集団、とりわけドン・カザークとの対比を念頭におきながら、この問題についての考察を進めていきたい。

一八世紀のザポロージェ・カザークを他のカザーク集団と比べてみた場合、まず注目さるべきは、ロシア国家の軍事・行政組織の中でそれぞれが占めた立場の相違であろう。ドン・カザークをはじめとするロシアの諸カザーク（ヤイク、グレーベン等）は、一七二一年三月三日の勅令により、従来の外務省の管轄下から陸軍省のそれに移された。^③この措置により諸カザークはロシア帝国の軍事単位の一つとしての扱いを受けるようになる。そのなかで、ひとりザポロージェ・カザークのみは、例外的な存在でありつつける。

ロシアに帰参するにあたり、ザポロージェ・カザークは、アンナ女帝の命によりキエフ総督（ゲネラル＝グベルナートル）フォン＝ヴェイスバハの監督下におかれた。^④キエフ総督がザポロージェ・カザークと係わったのは、主として外政の面においてである。総督はロシア国家の南部方面の外交担当者としてクリミヤ汗国、ポーランドとの交渉をつかさどっており、カザークが両国と境界争いその他の係争を起こした時には、これを仲裁すべく、諸事に介入した。^{⑤⑥}その際、介入は

時として外政の面のみにとどまらず、ザポロージェの司法、役職の選出制といった内政面にまで及んだ。この傾向は、フォン・ヴェイスバハの死後、後任として一七三五―五二年の間キエフ総督の職にあったレオンティエフにおいて、とりわけいちじるしい。

一七五〇年、ロシア国家のウクライナ統治策に大きな変化が生じた。ゲトマン職の復活である。話はさかのぼって一七世紀のなかば、ボグダン・フメリニツキーの対ポーランド反乱とそれにつづくウクライナのロシアとの「再合同」以来、ゲトマン職はウクライナおよびその一部とみなされたザポロージェの支配職であったが、一七三四年より空位となっていた。これが一七五〇年三月二日、十六年ぶりに復活したのである。新ゲトマンの地位に就いたのは、ウクライナ・カザーク出身のキリール・ラズモーフスキー。エリザヴェータ女帝の愛人であり、四二年にはその夫となったアレクセイ・ラズモーフスキーの弟である。ゲトマン・ラズモーフスキーは、兄の勢望を背景に、左岸ウクライナとザポロージェの支配者たらんとした^⑧。しかし、後者についてはキエフ総督が、かねてから持っていた権限を譲ろうとしなかったため、ゲトマンと総督の間にあつれきが生ずることとなる^⑨。この争いを解決すべく、一七五一年七月二四日、ザポロージェ・カザークに対する権限は、両者の間で分割された。ウクライナの一員たるザポロージェ・カザークの内政に関することがらはゲトマンに、ポーランド、クリミア汗国との係争がらみの外政については従来どおりキエフ総督に、それぞれ権限がゆだねられたのである^⑩。

ザポロージェ・カザークの行政上の立場は、その後、一七六四年にまたしても転機を迎える。同年十一月一日、ゲトマン制が廃止され、小ロシア省がウクライナ統治の担当部局となったのともない、ザポロージェ・カザークの監督者も、ゲトマン・ラズモーフスキーから小ロシア省長ルミヤンツェフにかわる^⑪。

以上から明らかのように、新セーチ期、とりわけ一七五〇年のゲトマン職の復活以降のザポロージェ・カザークのロシア帝国内における行政上の立場は、ウクライナのそれと不可分の関係にあった。ウクライナ出身者を中核とし、みずから

「ウクライナの息子」と称していたザポロージェ・カザークは、一七世紀のなかばにウクライナの一員としてロシアの支配下にはいった。この伝統は、一八世紀にセルビア人入植地、ノヴォロシア県があいついでザポロージェとウクライナの間で設けられ、両者の地理的な統一性が失われていくなかでも生きていた、といわねばならない。一七二一年以降、陸軍省の管轄下にはいったロシアの諸カザークとザポロージェ・カザークの相違も、ウクライナの一部としてのザポロージェのありように由来するのである。

ロシア帝国の行政上、ザポロージェ・カザークが占めた立場のこうした特殊性をふまえて、つぎに政府より課された軍事的義務の軽重という面からドンとザポロージェとを比べてみよう。これについて端的にいえば、一八世紀に前者が負わされた軍事的な負担は、後者のそれをはるかに上まわるものであった。なるほどザポロージェ・カザークは、一七三五—三九年のロシア—トルコ戦争の間、毎年、数千の兵を出した^⑪。一七六八—七四年のロシア—トルコ戦争に際しても一万一千名を戦場に送っている^⑫。その負担たるや並たいていではなかったであろう。しかし、ザポロージェ・カザークの負った軍事的な負担が、ほぼこのロシア—トルコ戦争への従軍に尽きていたのに対し、ドン・カザークの場合は、文字通り陸軍省による頭使のまま、戦火に晒されつづける。

ドン・カザークは、両度のロシア—トルコ戦争に、各々一万二千、二万名以上の兵を出した^⑬だけではない。その間おこなわれた一七四一—四三年のロシア—スウェーデン戦争には六千名、一七五六—六三年の七年戦争には一万六千名が動員されている^⑭。これに加え、平時においてもドン軍団は、ヴォルガ河沿岸、バルト海地方、シベリア、ペルシア国境等、各方面の守備のため、毎年、数百から数千の兵員を送り出した^⑮。また、こうした一時的な派遣にとどまらず、防衛上の拠点にドンからカザークが集団で移住させられるケースもみられた。一七二四年カフカースのアグラハン、グレーベンに各五百家族^⑯、一七三〇年代初頭ヴォルガ河沿岸のツァリーツィン・ラインに約一千家族が移り住まされたのが、それである（後者は、移住先であらたにヴォルガ・カザーク軍団を組織^⑰）。新セーチ期のザポロージェ・カザークが南ウクライナか

らほとんど動かなかったのと対照的に、ドン・カザークは、ロシア軍の一単位として東奔西走の日々を送ったといえるであらう。

ザポロージェとドンに対する政府の統制の強弱は、軍事面のみに限ったことではない。それが社会的な側面にもあらわれた例として、逃亡者の処遇をめぐる問題があげられる。元来、ロシアやウクライナから逃亡してきた農民によって形成されたカザークの社会には、いったんカザーク地域にのがれてきたものは、カザークとなり、旧主には引き渡されない、というおきてがあった。一八世紀のドンにおいては、この「カザークの自由」の根本ともいえるべき原則が、無に等しいものとなっていく。ロシア政府は、ドン軍団へのたびかさなる訓戒によって逃亡者の隠匿を禁じるとともに、ドンに搜索隊を派遣し、逃亡農民を見つけ出しては逮捕し、旧主のもとへ連れ戻した。運よく搜索隊の目のがれ、ドンに残れたものも、一七世紀までのように、カザークになれたわけではない。一八世紀のドン・カザークは、しだいに他身分のものへの参入を拒む、閉鎖的な軍人身分へと転化していったのである。^⑩

これに対し、ザポロージェの場合は、新セーチ期にあっても、逃亡者の避難先としての実を保ちつづける。^⑪ 封建領主の側からする逃亡者連れ戻しの試みは、カザークのしつような抵抗に出会う。^⑫ 逃亡者の多くはザポロージェにとどまり、あるいは農民としての生活を営みつつ軍団に税を納め、あるいはカザークとなって軍役を担った。カザーク身分が世襲によって受け継がれ、再生産されるようになっていったドンとのちがいが、ここにある。ザポロージェでは、一八世紀においてもなお、逃亡者にカザークとなる道が開かれており、また、これこそが軍団の人員補給の主たる源泉となっていたのである。^⑬

とはいえ、新セーチ期のザポロージェが完全に開かれた、平等な社会であったというならば、それはいささか早計にすぎよう。財産上の不平等にもとづく階層分化の進展と、その結果としての階級闘争の先鋭化というソヴェトの研究者により手ずれができるほどくりかえされてきたシエーマは、ザポロージェにとっても無縁ではない。富裕化した上層カザーク

（スタルシナ）の経済的、社会的抑圧に抗する下層カザーク（セロマ）の社会的プロテスト、これがガイダマク運動という形をとってあらわれてくる。^②

ガイダマクとは、一八世紀のウクライナで活躍した匪賊集団である。彼らは、カトリックのポーランドやイスラム教徒タタールを仇敵視した点でウクライナ民族運動の尖兵とみられるが、同時に、封建領主、富裕者に対する掠奪を盛んにおこない、この点では反封建運動の闘士であるともいえた。^③ ザポロージェのセロマは、このガイダマクの活動と緊密な結びつきを持ち、人員、指導者の最大の補給源となっていた。^④ このため、政府当局の目にはザポロージェ、イコール、ガイダマクの温床と映じたのも無理からぬことではある。一七五〇年十月五日付け元老院のキエフ総督あての指令にいわく、「これらガイダマク、すなわち悪党どもは、ほとんど皆ザポロージェ・カザークから成っている」と。^⑤

こうした事情をふまえたうえで、キエフ総督とゲトマンは、ガイダマク運動を鎮めるべく、ザポロージェ・カザーク対策にのりだした。その際、彼らはカザークが伝統的に持っていた司法上の自治権——ザポロージェで捕えられたものは、ザポロージェで裁かれる——にまで、あえて干渉の手をのばす。キエフ総督は、ポーランド、クリミヤ汗国に対するガイダマクの襲撃が国境紛争の火種になるという理由で、ゲトマンは、ウクライナからの逃亡者であるガイダマクはウクライナの法で裁かれるべきとの名目で、それぞれザポロージェの指導層に対し、ガイダマクを捕えた際には審理のため、これをキエフまで連行してくるよう命じたのである。^⑥

だが、このような施策によってもザポロージェへの逃亡者の流入とガイダマクの横行は止められない。反対に、それは六〇年代にはいつて、むしろ活発化の傾向をみせる。かくのごときザポロージェのありかたは、ドンの例に引き比べ、ロシア政府にとって苦々しいものであったにちがいない。この点、一七六二年五月三日付け元老院あての報告書の中で、聖エリサヴェータ要塞の司令官ムラヴィヨフが、ザポロージェ・カザークが逃亡者を受け入れなくなれば、ガイダマクも減り、彼らも「ドン・カザークのように名誉ある生活を営むようになるであろう」と述べているのは、当局の存念すると

ころをよくあらわした意見といえるであろう。

実際、ムラヴィヨフの意見とは別の形ではあるが、ザポロージェ・カザークを「ドン・カザークのように」しようとする試みもなかったわけではない。軍団の指導職の選挙制に対する干渉が、それである。一般にカザーク社会にあっては、軍団の長たるアタマンは、カザーク全員が参加権を持つ総会において毎年、選出されるのが伝統であった。アタマンは総会の場で表明された軍団構成員の総意の執行者として選ばれ、これにそぐわない行動をとった場合には改選される。これが、カザークの自治に他ならない。

しかし、ドン軍団においては、すでに一七二三年よりアタマンはツァーリによって任命されるようになり、これを替えるのは総会ではなく、ただツァーリの命のみとなった。^⑤アタマン選挙制の廃止である。これに対し、ザポロージェでは、新セーチ期にはいっても軍団の長コシエヴォーイ・アタマンをはじめとする指導職——スタルシナ職は、リーダーと呼ばれる総会で選出された。このリーダーは、先にふれたカザーク社会内部の階層分化と階級闘争の先鋭化にともない、激しい政争の場となっていく。下層カザーク・セロマが、富裕カザークの代表に対抗して、みずからが推す候補をコシエヴォーイ・アタマンに選出すべく騒乱を起こしたことも一再にとどまらない。^⑥

一七四〇年代以降、このようなスタルシナ職選出のありかたをザポロージェにおける社会混乱の原因であるとみなし、干渉を試みる動きがみられた。その急先鋒の役をつとめたのが、キエフ総督レオンティエフである。彼は、一七四〇、四三、四九、五〇の各年にわたり、セロマのリーダーへの参加によりスタルシナ職がしばしば改選されるのを予防すべく、同職の選挙制を廃止し終身制に変えるべし、という内容をもりこんだザポロージェの改革案を元老院あて提出した。^⑦そのねらいとするところは、「ドンやヤイクの軍団のアタマンがそうなっているように、今後コシエヴォーイ（アタマン……中村）をツァーリの勅令なしにカザークの手で勝手に改選させない」（一七四四年六月三日付けレオンティエフの元老院あて報告）という点にあった。すなわち、ザポロージェの「ドン化」の試みである。これに呼応してスタルシナの一部

からも選挙制の廃止、制限をめざす動きがみられたが、結局、ことは選挙制の廃止、アタマンの任命制にまではいたらない。ザポロージェの指導層自身、他のカザーク軍団ならいざしらず、ザポロージェのような自由な軍団では選挙制の廃止は無理と考えていたし、元老院もレオンティエフの改革案を時宜を得ぬ不適當なものとして退けたのである。^⑤その後、一七六四年にザポロージェ・カザークの監督者となった小ロシア省長ルミヤンツェフが、あらたに選挙をおこなうことを禁止しようとしたが、この時もカザークは屈さず、選挙制を固守している。^⑥

以上みてきたごとく、新セーチ期のザポロージェ・カザークは、ロシア政府の側からする統制強化の試みに直面した。この試みはある程度の成果はあげたものの、ザポロージェ軍団を、他のカザーク集団のようにロシアの軍事組織の一単位とするまでにはいたらない。ザポロージェ・カザークは「ドン化」の運命をまぬがれ、伝統的な「カザークの自由」をいくぶんなりと保持しつづけたのである。その理由は、いったい何であったのか。

まず考えられるのは、彼らがもともと帰属していたウクライナが、ロシア帝国内において占めた地位の特殊性である。一七世紀のなかば、ウクライナはロシア国家に併呑されるのではなく、ゲトマン支配下の半独立国の資格でロシアのツァーリの宗主下にはいった。これにともないツァーリに服属するようになったザポロージェ・カザークにとり、ツァーリの支配はかならずしも絶対的なものではなかったのである。^⑦とはいえ、ロシア国家への編入の際の事情はともかく、一八世紀にはウクライナは決定的にロシア国家の一地方と化す道を歩む。このことを考えると、ウクライナとザポロージェの関係から、ザポロージェがロシア国家の行政上占めた特殊な地位が導き出されるとしても、これをザポロージェが自由を維持しえた理由とまでするのは、いきすぎといわざるをえない。

ロシア政府がザポロージェの「ドン化」をためらった原因として筆者があげたいのは、それゆえむしろ、前章でみた南ウクライナ北部の入植地の存在である。一八世紀、オーストリア、トルコと競いつつステップ辺境の農業植民地化をおしすすめたロシア国家にとり、北部入植地は、その足がかりというべきものであった。ここにザポロージェ軍団の存在を備

値あらしめた理由が求められる。開発がはじまったばかりの、ひよわな北部入植地の植民を順調に進めるためには、その南方にあったザポロージェエを防壁とするのが不可欠の条件であった。この点、ドンとザポロージェエの異なるところでもある。ドンの場合にもザポロージェエの北部入植地にあたるものがなかったわけではない。ドンの北方に位置するスロボトスカヤ・ウクライナが、それである。ただ、スロボトスカヤ・ウクライナへの入植は、すでに一七世紀なかばから本格的に進められており、一八世紀のドンの軍団には、もはやこれを保護すべき防壁としての意義は、ほとんどなかった。ために、ドン・カザークは陸軍省の命により故郷をはるかに離れての遠征を強いられる。これに対し、ザポロージェエ・カザークの場合は、新セーチ期のほぼ全期間を通じ、本拠から遠くへ動かされることはない。南ウクライナをうかがうクリミヤ汗国、トルコに対しては、らみをきかせる、というのが彼らに与えられた役どころであった。

ところが、南ウクライナ北部への入植地の設営は、くりかえし述べてきたように、元来ザポロージェエ・カザークの支配領域であったヴォーリノスチの蚕食に他ならない。それゆえ、入植地の拡大はカザークの気に入るはずもなく、事実、彼らの側からのしつような抗議を招いている（次章参照）。かかる状況で他のカザーク集団においてみられたのと同様、ザポロージェエの自由に対する侵害が強行されればどうか。ザポロージェエ・カザークは、北部入植地を守るどころか、反対にロシアの敵、クリミヤ汗国、トルコと結ぶのも辞さなかったであろう。一六世紀以来、しばしば結ばれたカザーク・タタール同盟の再現である。そうなれば、カザーク・タタール連合の攻撃にさらされる運命となる北部入植地は、ひとたまりもない。このように、北部入植地の安全保障を念頭におくかぎり、ロシア政府は、ヴォーリノスチを蚕食する代償としてザポロージェエ・カザークに対し一定の自由の余地を認めざるをえなかったのである。彼らの勝手気ままを抑えつけようとする動きにも手綱がかけられた。ザポロージェエの性急な改革を説くキエフ総督レオンティエフの提案を元老院が容れなかったゆえんである。

かくして、いささか皮肉な言い方をすると、新セーチ期のザポロージェエ・カザークは、彼らの土地に対する権利を侵害

しながら拡大された北部入植地があったからこそ、他のカザークと比べてより大きな「カザークの自由」を維持することができた」と考えられる。それでは、彼らザボロージエ・カザークは、この北部入植地とどのような関係をとりむすんだのか。前述がかなり長くなしたが、本稿の主題である西進の関係をめぐって次章をみていくことにしよう。

- ㉑ А. А. Скальковский, История Новой Сечи..., ч. II, с. 44-45; Деда касационних запорожцев (1715-1774 гг.), сост. А. Андриевский.—«Записки Одесского общества истории и древностей», т. XIV (Знак Деда 1856), с. 283-95.
- ㉒ А. А. Скальковский, Указ, соч., с. 47-69.
- ㉓ ПСЗ, т. VI, № 3750 от 3 марта 1721 г.
- ㉔ А. А. Скальковский, Указ, соч., с. 45.
- ㉕ 本邦の南ウクライナに於けるカザークの歴史, 1715-1774, Деда, с. 296-302, 313-16, 398-415, 419-21, 429-54, 491-504, 510-20, 524-27, 576-79, 587-91, 611-13; Материалы по истории Запорожья в XVIII в. сост. П. А. Иванов.—«Записки Одесского общества истории и древностей», т. XXI (Знак Материалы 1856), с. 80-81 本邦の南ウクライナに於けるカザークの歴史, Деда, с. 296-302, 483-91; Материалы, с. 67-68, 82-83 巻末。
- ㉖ Е. А. Запоровский, Взаимоотношения Запорожья и русской правительственной власти во времена Новой Сечи.—«Записки Одесского общества истории и древностей», т. XXXI, с. 56.
- ㉗ Там же, с. 64; Материалы, с. 69, 90-91.
- ㉘ Деда, с. 511-20; Е. А. Запоровский, Указ, ста., с. 64-65, 69.
- ㉙ Там же, с. 65.
- ㉚ Указ Имп. Екатерины II об учреждении Малороссийской коллегии.—«Киевская старина», т. VI, 1883, август, с. 738-40.
- ㉛ А. А. Скальковский, Указ, соч., с. 79, 81, 95.
- ㉜ В. О. Голобуцкий, Запорозька, с. 101.
- ㉝ 本邦の南ウクライナに於けるカザークの歴史, 1715-1774, Деダ, с. 296-302, 313-16, 398-415, 419-21, 429-54, 491-504, 510-20, 524-27, 576-79, 587-91, 611-13; Материалы по истории Запорожья в XVIII в. сост. П. А. Иванов.—«Записки Одесского общества истории и древностей», т. XXI (Знак Материалы 1856), с. 80-81 本邦の南ウクライナに於けるカザークの歴史, Деда, с. 296-302, 483-91; Материалы, с. 67-68, 82-83 巻末。
- ㉞ А. П. Пронштейн, Земля Донская в XVIII в. Ростов-на-Дону, 1961, с. 122-23.
- ㉟ В. Х. Казин, Казацья войска, СПб., 1912, с. 103.
- ㊱ А. П. Пронштейн, Указ, соч., с. 123-24.
- ㊲ Акты, относящиеся к истории Войска Донского, собранные А. А. Лининым, т. I, Новочеркасск, 1891, № 198.
- ㊳ Там же, т. II, ч. I, 1894, № 46, 48, 59-60, 71.
- ㊴ А. П. Пронштейн, Указ, соч., с. 111-17.
- ㊵ 本邦の南ウクライナに於けるカザークの歴史, В. О. Голобуцкий, Запорозька, с. 108-34 巻末。
- ㊶ Деда, с. 619.
- ㊷ В. О. Голобуцкий, Указ, соч., с. 134.
- ㊸ В. А. Голобуцкий, К вопросу о социально-экономических отношениях на Запорожье во второй половине XVIII в.—«Исторические записки», 1953, т. 44, с. 231-52; Он же, Гайдамацкое движение на Запорожье во время «Колывищины» и крестьянского

восстания под предводительством Е. И. Пугачева—Исторические записки, 1956, т. 55, с. 310-43.

②④ ホブズボームは、ガイダマクをはじめ、東欧の潜在的な自由の余地が残されていた地域で成立した自由で武装した人間集団を匪賊の一形態、ハイダックとして類型付けている。これについては、E・J・ホブズボーム 斎藤三郎訳『匪賊の社会学』（みすず書房、一九七二年）七〇—八六頁参照。

②⑤ В. А. Голобуцкий, Указ. ста.; В. А. Маркина, Крестьяне Правобережной Украины, конец XVII-60-е года XVIII ст. Киев, 1971, с. 157-73.

②⑥ Дера, с. 474.

②⑦ В. О. Голобуцкий, Запорізька, с. 77; Е. А. Заропецкий, Указ. ста. с. 67-68.

②⑧ Дера, с. 635.

②⑨ А. П. Прошурейн, Указ. соч., с. 226-27.

三 ザポロージェ・カザークと北部入植地

新セーチ期のザポロージェ・カザークと北部入植地との関係を考察するにあたり、まず、議論の前提としてザポロージェにおける人口の変化を明らかにし、これを第一章でみた北部入植地の人口動態と比較検討することからはじめたい（以下、人口数はことわりのないかぎり男子）。

最初に、カザークのクリミヤ汗国からの帰還の直後であるが、この時点では、いまだ入植の端緒が開かれたばかりの北部入植地に比べ、南ウクライナのもとの住人であったカザークの数的優位はゆるがない。一七三四年に帰還したザポロージェ・カザークの数が一万名（他にごく少数の妻帯カザークと農民）^①であったのに対し、北部の「ザドニエプルの

②⑩ Ар. Андур-ский, Запорізькие выборы и порядки поповина XVIII в.—«Киевская старина», т. VI, 1883, май, с. 127-39; Дера, с. 423-34, 457-61, 466; В. О. Голобуцкий, Указ. соч., с. 95-96.

②⑪ Там же, с. 87; Дера, с. 316-23, 461-62, 478-82; Е. А. Заропецкий, Указ. ста., с. 57-58; Матеріалы, с. 71.

②⑫ Дера, с. 322.

②⑬ Там же, с. 455-56, 462-63, 465-70; Матеріалы, с. 72; В. О. Голобуцкий, Указ. соч., с. 88-92, 94-95.

②⑭ Там же, с. 92-97; Матеріалы, с. 98.

②⑮ Дера, с. 324, 461; Ар. Андур-ский, Указ. ста., с. 129.

②⑯ А. А. Скальковский, Указ. соч., с. 280.

②⑰ 一七世紀後半のザポロージェ・カザークとロシア国家との関係については、拙稿「ザポロージェ・カザークとウクライナ（一七世紀後半）」『西洋史学』一三八号参照。

北部入植地とザポロージェの人口比（男子）

年代	A 北部入植地	B ザポロージェ	A/B
1734—40	8,167	10,000	0.8
1745	22,144	11,109	2.0
1760年代初	48,718	18,769	2.6
1764	116,047 (90,387)		6.2* (4.8)
1770年代初	131,985 (108,582)	30,602	4.3 (3.5)
1775	150,766 (124,045)	54,000	2.8 (2.3)

（ ）内はエカテリーナ，エリサヴェトグラート両郡のみ

*は1760年代初のザポロージェとの人口比

地」では同じころに約二〇〇〇名、一七三一年から建設のはじまったウクライナ・ラインの人口も四〇年によくやく六一六七名に達したにすぎない。しかし、この数的な優劣は、はやくも一七四〇年代なかばまでに逆転する。帰還以後のザポロージェ・カザークの人口は、一七三五一三九年のロシア・トルコ戦争による損害もあって停滞気味であり、一七四五年の時点でも一万一〇九名にとどまった^②。この間、北部入植地における人口の増加はめざましい。一七四五年、「ザドニエブルの地」に九七〇〇名、ウクライナ・ラインに一万二四四四名と、北部の合計人口はザポロージェの二倍に達した。つぎに、北部植民の第二期、いわゆる「セルビア人入植の時代」には、北部入植地の数的な優位がますます顕著となっていく。この時期、ザポロージェにおいても漸次、人口の増加がみられ、一七六〇年代はじめには、一万八七六九名を数

えるまでになるが、北部入植地の人口増は、それをはるかに上まわった。多少の年代的なばらつきはあるものの六〇年代初頭、北部入植地の各地域の人口は、ノヴァヤ・セルビア六三〇五名（一七六一一年）、ウクライナ・ライン一万二六九二名（一七六二年）、ノヴォスロボトスキー・カザーク連隊区一万九六四五名、スラヴァノ・セルビア一万七六名（一七六三年）を数えた。これらの合計は、四万八七一八名。すなわち「セルビア人入植の時代」の末期、北部入植地の人口はザポロージェの二・六倍に達したのである。

最後に、北部植民の第三期、一七六四年のノヴォロシア県の設立以降について。新セーチ期の末葉にあたる同期の人口史上の特徴は、ノヴォロシア県設立の直後に北部入植地の対ザポロージェ人口比が最大に達し、その後しだいに比率が下がっていく、という点にある。一七六四年、設立されたばかりのノヴォロシア県の人口は一一万六〇四七名^④。六〇年代はじめのザポロージェの一万八七六九名と比べると、

実に六・二倍である。これを頂点に、その後ノヴォロシア県の人口の伸びがにぶり、かわってザポロージェエの人口増のペースが加速したことにより、前者の後者に対する人口比は、しだいに小さくなっていく。一七七二年のノヴォロシア県の人口一三万一九八五名^⑤に対し七〇年代はじめのザポロージェエの三万六〇二名^⑥（四・三倍）、一七七五年には一五万七六六名^⑦に対し五万四〇〇名^⑧（二・八倍）という具合に。また、ノヴォロシア県のうち、ザポロージェエ・カザークが元来自分たちの支配領域であるとみなしていたエカテリーナ、エリサヴェトグラト両郡の人口と、その対ザポロージェエ比をみても、一七六四年九万三八七名（四・八倍）、一七七二年一〇万八五八二名（三・五倍）、一七七五年一二万四〇四五名（二・三倍）^⑨になる。

南ウクライナ植民の第一、二期、ザポロージェエに比べて北部入植地の優位のうちに進展した人口増のペースが、第三期のノヴォロシア県時代に逆転したのはなぜか。その主因としては、ザポロージェエ・カザークの北部入植地に対する襲撃と、それにとまなう人口の移動があげられる。以下、この点につき、いささか敷衍を試みるとしたい。

新セーチ期、ザポロージェエ・カザークは北部入植地の拡大により支配領域の縮小をよぎなくされていくが、彼らはこの処遇を甘んじて受けたのか。むろん否である。カザークはまず合法的な手段を通じて権利を回復せんとした。ザポロージェエ・カザークは、つとに一七四〇年代よりロシア政府に対し、入植地を撤廃し、土地を自分たちに返すよういく度となく請い願っている^⑩。とりわけ、一七五六年以降、七五年の新セーチの廃絶にいたるまでの間はザポロージェエから派遣された代表が首都にほぼ常駐し請願をつづけた^⑪。これに対し、政府はカザークの訴えを頭から退けるでもないが、彼らの言い分を容れるでもない、というあいまいな態度をとりつつ、その間も北部への入植を漸次、進めていく。

このため業を煮やしたカザークは、請願という合法的な手段にとどまらず、実力行使すなわち北部入植地への襲撃という挙にでるようになる。一七六〇年代末よりカザークは、ノヴォロシア県のエカテリーナ、エリサヴェトグラト両郡に對し激しい襲撃をくりかえす^⑫（カザークがもともと自分たちの支配領域と考えていなかったバフムート郡のみは、襲撃の

対象とはならず^⑩。その結果、エカテリーナ、エリサヴェトグラート両郡は、一七六七―七四年の間だけで総計三三万二六九五ルーブル相等の損害をこうむった^⑪。こうした物質的な被害の甚大さもさることながら、植民史においてより重要なのは、襲撃にともなって生じた大規模な人口の移動である。カザークは、一七六七―七四年にかけての両郡への襲撃に際し、多数の住民をザポロージェに連れ去った。その数については諸説があるが、少なくとも見積って男子二七〇五名^⑫、多くみて五四五五名^⑬にのぼったとされる。後者の場合には、女性も含めると一万名近い人々が北部入植地からザポロージェに移ったわけだ。

問題は、こうした大規模な人口の移動が、ただ襲撃の際の強制によってのみ実現したのではなかった、という点にある。ロシアの南部辺境は、古来、たえまなくタタールの襲撃を受け、そのつど多くの人々が奴隸として売られるべく、連れ去られた。ザポロージェ・カザークによる連れ去りは、このようなタタールの奴隸狩りとは明瞭な一線を画さるべきものであった。この点、ノヴォロシア県住民のザポロージェ・カザークに対する好意的な態度を説くのが、ポロンシカ・ヴァンレンコである。彼女は、わずか二〇―二五家族の入植者をザポロージェに連れ去った例などを引きながら、住民が自発的に北部入植地を去った可能性を示唆する^⑭。ロシア人とカザークとがあまり交渉を持たなかった一方、ウクライナ人やヴァラキア人は、強制によるよりも、むしろすすんでザポロージェに去った^⑮、という。とすれば、ことは連れ去りというよりも、むしろザポロージェ・カザークの襲撃を利用した逃亡とみなされるべきではないか。

この逃亡という観点をさらに明確にうちだしているのが、ゴロブツキーである。彼は、逃亡の生じた背景として、ノヴォロシア県の設立にあたり左岸ウクライナの住民が槍騎兵連隊区に編入され（第一章参照）、槍騎兵となった際に、この処置に不満を感じていたことをあげる^⑯。不満をいだいた槍騎兵は、逃亡を試みる一方、一七六七―七〇年にかけて一連の反乱に決起した。これが一七六九―七〇年に鎮圧された後、彼らのザポロージェへの逃亡は、とりわけ活発になっていく^⑰。槍騎兵は、おりから激しさを増したザポロージェ・カザークの襲撃に乗じて北部入植地をあとにした。実際、カザークと

ともにザポロージェエに去ったノヴォロシア県の住民の多くが、槍騎兵連隊区に所属していたのである。^②

一八世紀の南ウクライナは、南北二つの構成部分から成っていた。北部の入植地と南部のザポロージェ・カザークである。ロシア国家にとり、カザークが入植地を守る防壁となり、その間、北部への入植が順調に進めば両者の関係は理想的であるといえた。このいわばロシア国家の論理に則した南ウクライナ南北の役割分担が、現実には機能したのが入植の第一期である。この間、ロシア・トルコ戦争への従軍をはじめクリミヤ汗国、トルコの攻撃の矢面に立ったザポロージェエ盾として、北部入植地はめざましい勢いで人口増を達成する。

だが、ことはそういつまでもロシア国家の思い通りには運ばない。入植の第三期、とくに一七六〇年代末にはいると、ザポロージェエは、北部入植地を守り人口増を助長するどころか、逆にこれを阻害するものとさえなっていく。第一章で見たとように、ノヴォロシア県エカテリーナ郡のドニエプル槍騎兵連隊区は、一七六七年から七二年にかけ、男子人口の三一・四パーセントというカタストロフィックな人口減を記録した。同区は、一七六八―七四年のロシア・トルコ戦争中のクリミヤ・タタールによる襲撃をまぬがれていたにもかかわらず、である。この急激な人口減の原因としては、ザポロージェエ・カザークによる連れ去り（ないしはカザークの襲撃を利用した逃亡）に思いをいたさざるをえない。

さらに、ここではザポロージェエへの人口の移動と北部入植地の社会構成、とりわけ農奴人口の分布との関連についても注意をうながしておきたい。ノヴォロシア県時代、エリサヴェトグラート郡では農奴人口が急増し、一七七二年には二万四九八四名（男女）を数えるまでになるが、その九割以上が同郡北部の二つの連隊区に集中し、南部の二連隊区にはごくわずかの農奴しか住んでいなかった（第一章参照）。南部の二連隊区の領主層は、いまだかの地に農民を移り住ませ、農奴化する決心がつかなかったのである。^③ こうした農奴人口の分布における極端な偏りとの関連で注目し得るのが、これもまたいちじるしい地理的偏差を示したザポロージェエへの人口移動である。一七六七―七四年の間、カザークの襲撃に際してエリサヴェトグラート郡から立ち去った五二九三名のうち、実に四七九四名（九〇・六パーセント）が同郡南部の

二連隊区の住民によって占められた。^② エリサヴェトグラト郡の南部には、ザポロージエへと通じる大きな風穴が開けられていたのである。換言するならば、農奴利用の不可欠の前提となるべき農民の土地への緊縛という条件が欠けていたわけである。南部の二連隊区に農奴がほとんど存在しなかったのも、むべなるかなといわねばならない。

農奴制に基礎をおく一八世紀のロシア国家にとり、このような事態はゆゆしき問題であった。社会制度の根幹をなす農奴制をあらたにロシア領となった地域にも敷衍していく。これこそがロシア国家の側からみた辺境の「正しい」開発のあり方に他ならない。その意味でカザークの襲撃は、北部入植地の「正しい」発展を阻害する「悪影響」であったといえよう。

ザポロージエの北部入植地に対する「悪影響」についてももうひとつ、社会的騒乱の連動という点もみのがせない。これは、ノヴォロシヤ県設立時、槍騎兵連隊区に編入された旧左岸ウクライナ住民の間における不満の醗酵と切り離せない現象であった。不満をいだいた槍騎兵は、先に述べたように、ザポロージエへの逃亡を試みる一方、一七六七―七〇年にかけて一連の反乱に決起している。この「槍騎兵の反乱」は、ザポロージエの不満分子が中心となって起こした騒乱——ガイダマク運動の頂点とされる一七六八年春から秋にかけてのコリイーフシチナ、^③ 同年十二月のセーチにおけるセロマの蜂起——と密接な関係を持ちながら進められたのである。ウクライナ史においては、民衆の社会的不満は、ザポロージエ・カザークの起こす騒乱とたやすく結びつくという伝統があった。左岸ウクライナ出身者を中核とする槍騎兵の反乱とザポロージエの騒乱との連動は、かかる伝統の一ヴァリアントとみなされるであろう。

ザポロージエを楯に南ウクライナ北部の植民をはかるといふロシア政府の図式は、かくして一七六〇年代末よりカザークの北部入植地への襲撃をはじめとする一連の「悪影響」によって破綻していく。それでも、ザポロージエが北部入植地に対するタタールの攻撃を遮断する防壁としての機能を十分にはたしていれば、まだしもなのであったが、この点についても問題が生じていた。その端的な例として、一七六八―七四年のロシア・トルコ戦争の初期にカザークが示した態度を

あげておきたい。

一七六九年一月、タタールの遠征軍がザポロージエとヴォロシヤ県のエリサヴェトグラート郡を襲った。この時、カザークは防衛のための努力をほとんど払わなかったのである。カザークがとったこの奇妙な行動の背景をめぐっては、爾来さまざまな説明がなされてきた。その一つとして、彼らはタタールに内通していたのだ、という説がある^⑦。内通説については、否定的な見方もあるが、ザポロージエの伝統的な対外政策からみてかならずしも考えられないわけではない。一六世紀以来、時に応じてクリミヤのタタールと連合して周辺の大国——ロシア、ポーランド、トルコ——に対抗する、というのがザポロージエのお家芸ともいべき外交政策であった^⑧。また、北部入植地を敵視するカザークが、それへと通ずる道を阻むべくタタールの前に立ちはだかる気にはなれなかった、ということもありえよう。いずれにせよ、内通の真偽はおくとして、問題は一七六九年のタタールの来襲に際し、ザポロージエが北部入植地を守る防壁とならなかった、という事実である。

ロシア政府は、この頼りがいのない防壁を補うべく一七六八—七四年の対トルコ戦争の渦中、クリミヤ汗国封じ込め用のあらたな防衛線の設営にのりだす。一七七〇年にはじまったドニエプル・ライン——ドニエプル河からアゾフ海にかけて——の建設がそれである。従来、ロシア国家の対タタール防衛線、入植地の設営は、もっぱらザポロージエの北方よりヴォーリノスチを蚕食するかたちで進められてきた。これに対し、ドニエプル・ラインは、史上はじめてザポロージエの南方に設けられ、いわばザポロージエとクリミヤ汗国との間に打ち込まれたくさびとなった。この点、ドニエプル・ラインの持つ意義は画期的といわねばならないが、ロシア・トルコ戦争の帰趨はこのラインすら無用なものとしていく。一七七四年、戦争に勝利したロシアは、トルコとクチュク・カイナルジ条約を結び、クリミヤ汗国をトルコの宗主下から解き、逆に将来これを自国の領土と化すべく独立させた（実際、八三年には汗国を併合）。タタールの脅威の消滅である。それとともに、ザポロージエの新セーチにも最後の日がせまることとなるのである。

ロシアとトルコ戦争終結の翌一七七五年、ロシア政府はザポロージェ・セーチの廃絶を決定した。政府の命を受けたテケリーイ將軍の率いるロシア軍が、六月五日、セーチを占領。ここにザポロージェの新セーチ時代は、あっけない幕切れを迎える。ロシア政府が、この一見とうとうにも思えるセーチ廃絶の決定を下した動機は何にあったのか。以下、この問いに対する答えをもって本章のしめくりとしたい。

ゴロブツキーをはじめ多くの研究者は、セーチ廃絶の動機を軍事的な観点から説明する。一七七四年のクチュク・カインアルジ条約の締結により、クリミヤ汗国はトルコの対ロシア戦用の尖兵たることをやめた。その結果、タタールの襲撃から南方を守る前哨としてのザポロージェ・セーチの軍事的な意義も失われた、と。話の筋としては、その通りであろう。しかし、この説明だけでは、セーチ廃絶の必然性が十分に説明されたとはいえない。それは、他のカザーク集団がたどった運命をひきあいになせば明らかである。ドンやヤイクのカザーク集団も、元来はロシア國家の辺境に位置しており、ロシアの領土的な拡大にともない軍事的な前哨としての意義を失っていった。ここまではザポロージェと同様である。それにもかかわらず、これらのカザークは、特殊な軍人身分へと転成をとげつつ、ロシア帝国内で生きつづけたのである。また、プガチョーフの乱（一七七三―一七七五年）をはじめとする民衆運動への参加という点からセーチ廃絶の理由が説明される場合もあるが、これも他のカザークの例と引き比べてみれば、それほど説得的なわけではない。ドン・カザークはラージンの乱（一六七〇―一七七年）、ブラーヴィンの乱（一七〇七―一七〇九年）の、ヤイク・カザークはプガチョーフの乱の仕掛け人、主犯格であった。それでもなお、彼らは、反乱鎮圧の後、存在自体を抹殺されるまでには、いたっていない。これらの乱に関与したとはいえ、はたした役割の点では副次的なものにとどまったザポロージェ・カザークだけが断絶処分を受けるというのは、酷にすぎはしまいか。

それゆえ、セーチ廃絶の動機を説明するには、ザポロージェ・カザークのみにかかわる特殊な背景にひきつけて考察する必要があろう。ここどうかびあがってくるのが、南ウクライナ北部への入植とこれに対するザポロージェ・カザークの

関係である。

セーチ廃絶から二ヶ月後の八月三日付けで出された勅令の内容の分析を通じて廃絶の動機を究明しようとしたポロンシカ・ヴァンレンコはいう。ロシア政府は、カザークの生活を自堕落なものとして批難する一方、彼らが一種の国家内国家を形成しつつあることを憂慮していた。カザークは、ノヴォロシア県から何千人もの住民を連れ去り、彼らを耕作に従事させて独自の農業システムをつくりだした。この施策を通じてカザークがロシア帝国内に完全に自立した国家を築こうとしたことこそ、ロシア政府によるセーチ廃絶の動機である、と。この点、カザークの自立と農業の関係について一言。

非農耕民であったカザークは、伝統的にロシア国家に穀物の供給をまかしておき、これが彼らのツァーリに対する従属の主因となっていた。新セーチ期のザポロージェエには、この弱点を克服しようとする動きがみられる。これについては、つとに帝政期のスカリコフスキー、スマーノフなどが注目していわく、一七六五年より新セーチ廃絶の年までコシュエヴォイ・アタマンをつとめたカルニシエフスキーは、ロシア国家への従属の主因である穀物不足を解消すべく、移住者を呼びよせ、農業の振興に力を傾けた、と。^④ また、ソヴェト期のゴロブツキーもザポロージェエの北部にある数十の聚落（スロヴォダー）における農業の奨励に、とりわけ力がいれられたと指摘する。^⑤ この聚落こそは妻帯カザークと農民の居住地であり、北部入植地からザポロージェエへのがれてきた逃亡者家族の受け皿に他ならない。こうした勸農策により、少なくとも一七五〇年代なかばまでは外部からの穀物の輸入を不可欠としていたザポロージェエは、その後、逆にこれを輸出するまでになる。^⑥

ザポロージェエ・カザークは、かくして新セーチ期の末には従来ロシア国家に対する従属の主因となっていた食料不足を解消しつつあった。ここにいたり、南ウクライナ北部の入植地は、ロシア政府とザポロージェエ・カザークそれぞれにとり、まったく異なる意味あいをおびることとなる。ロシア政府にとっては黒海北岸への南下を達成するための拠点としてのノヴォロシア、ザポロージェエ・カザークにとっては経済的、政治的自立の基盤となるべき就農人口の供給源としてのヴォー

リノスチ北部である。

一七七五年の新セーチの廃絶は、こうしたロシア政府「ザポロージェ・カザーク間の利害関係の対立の帰決として理解されるのである」。

- ① A. A. Скальковский. Опыт статистического описания Новороссийского края, ч. I, с. 220.
- ② B. M. Кабызан. Заселение, с. 81.
- ③ Там же, с. 97. なお他に、一七六二年のニカチリーナ二世の即位に際して宣稱したカザークが、二万二八一名と、数も異なる(A. A. Скальковский. История Новой Сечи..., ч. I, 1885 (издание третье), с. 52)。また、コロブツキーは、一七五五年と五九年のデータをともに男女総計一〇万名と、数もあげている(B. O. Горобуцкий. Запоризька, с. 159-60)。これについては推計の部分が大きく異なる首肯が必要である。カンキーンとサホロージェの総人口が一〇万名に達したのはいくつか、一七七〇年代の末になつてからのことではあると推定される(B. M. Кабызан. Заселение, с. 97-98)。
- ④ Там же, с. 121.
- ⑤ H. Д. Полоцкая-Василенко. Из истории Южной Украины в XVIII в..., с. 168.
- ⑥ B. M. Кабызан. Заселение, с. 118.
- ⑦ Там же, с. 120-21.
- ⑧ Там же, с. 121; H. Д. Полоцкая-Василенко. Указ. стл., с. 165-66.
- ⑨ N. D. Polons'ka-Vasylenko, 'Settlement', pp. 28-32, 37, 73-75.
- ⑩ Ibid., p. 291.
- ⑪ B. M. Кабызан. Заселение, с. 110-11. カザークと新入植者との争い

- の争いである。一七四〇年代から一七五〇年代にわたつた(Джана, с. 359-72, 613-14, 628-54; N. D. Polons'ka-Vasylenko, 'Settlement', pp. 292-97)。また、イヴァーノフは、サホロージェ・カザークとその隣人のポーランド人、ドン・カザーク、クリミヤ・タタールとの争いについて指摘した後、「しかし、これらの争いは、かつてのザポロージェ領に新規に入植したものととの争いに比べると、何ほどのことでもなかった」(Материалы, с. 69)と述べてカザークと新入植者との利害対立の深刻さを強調している。
- ⑫ B. M. Кабызан. Заселение, с. 114.
- ⑬ Там же, с. 111, 117.
- ⑭ B. O. Горобуцкий. Запоризька, с. 123. (ただし、コロブツキーは、これを新入植者によるものと推定する)。
- ⑮ B. M. Кабызан. Заселение, с. 111, 117. その他、ボロニンカ・ヴァンニンなどは、少なくとも三回〇五名、多くは五三七四名と、数も異なる(N. D. Polons'ka-Vasylenko, 'Settlement', pp. 320-21)。
- ⑯ 男子五四五名に加え、マリサウ・マダグラト郡の女子二四二名(B. M. Кабызан. Заселение, с. 111)。¹⁾ニカチリーナ郡の女子はすべて不明。
- ⑰ N. D. Polons'ka-Vasylenko, 'Settlement', p. 322.
- ⑱ Ibid., p. 325.
- ⑲ B. O. Горобуцкий. Запоризька, с. 121.
- ⑳ Там же, с. 122.

④ エリサヴェトヴラータ、エカテリーナ両郡から来た男十二七〇五
 名中一八二八名（六七・六パーセント）が植騎兵連隊区に所属（Там
 же, с. 123）。カプキーンのおける数でも、前者から連れ去られた男
 女五二七三名（七〇・三三〇名（六一・〇パーセント）が植騎兵連隊
 区所属（В. М. Кабузан. Заселение, с. 111）。

⑤ Там же, с. 110.

⑥ Там же, с. 111.

⑦ Ротенберг Н. Костомаров. Материалы для
 истории Колпинщины или резни 1768 г.—《Киевская старина》, т.
 III, 1882, август, с. 297-321; А. А. Скальковский. Указ. соч., ч.
 II, с. 329-58; В. А. Голобуцкий. Гайдамакное движение..., с. 321
 -34 参照。

⑧ Ротенберг Н. Там же, с. 334-39; Он же. Запорож-
 кое казачество. Киев, 1957, с. 406-9 参照。

⑨ N. D. Polons'ka-Yaslenko, 'Settlement', pp. 287-90.

⑩ E. A. Запорожский. Взаимоотношения Запорожья и русской пра-
 вытегострелной впасти..., с. 71-72; Замскии Барона Тора о тата-
 рском набеге 1769 г. на Ново-Сербию (с предисловием и после-

словием С. Е.)—《Киевская старина》, т. VII, 1883, сентябрь =
 октябрь, с. 164.

⑪ たごえは「スカロロフスキーは、タタールの襲撃をへんとめるこ
 とをいふなかつたのは、襲撃をまはりに急がし多勢でなれだたため
 せなり」（А. А. Скальковский. Указ. соч., ч. III, с. 14, 17）。

⑫ 前掲拙稿 参照。

⑬ Ротенберг Н. Там же, с. 329-30.
 ч. III, с. 129-32; В. О. Голобуцкий. Запорожца, с. 104-7 参照。

⑭ В. А. Голобуцкий. Запорожское казачество, с. 421; А. А. Ска-
 льковский. История Новой Сечи..., ч. III, с. 175-76.

⑮ В. А. Голобуцкий. Указ. соч., с. 420-21.

⑯ N. D. Polons'ka-Yaslenko, 'Settlement', pp. 329-30.

⑰ А. А. Скальковский. Указ. соч., ч. II, с. 267; А. Шмапов. Пре-
 дсмертная поземельная борьба Запорожья (Эпизод из его порра-
 ничных споров с 6. Слободскою Україною).—《Киевская старина》,
 т. VII, 1883, декабрь, с. 611.

⑱ В. О. Голобуцкий. Запорожца, с. 211-12.

⑲ В. А. Голобуцкий. Указ. соч., с. 352-53.

おわりに

以上、述べてきたことをふりかえりながら、本稿のはじめに提起した問題——南ウクライナという統一体の構成要素と
 して見た北部入植地とザポロジエ・カザークの関係——に答えていこう。

一八世紀後半は、ヨーロッパのステップ境界が、東欧の大国の間で農業植民地として最終的に分割されていく時代であ
 った。このステップ境界の農業植民地化の典型的な例が、ロシア国家による南ウクライナの開発である。ロシア国家は、

外国人入植者の導入、ノヴォロシヤ県の設立等の施策を通じて南ウクライナ北部への植民事業をおしすすめていく。かくして北部入植地の人口増がはかられる一方、南ウクライナの南部にあったザポロージェ・カザークには、クリミヤ汗国、オスマン・トルコの攻撃から北部を守るべき軍事的障壁としての役割がうけもたされた。

南ウクライナの南北の、こうしたいわば国家の論理に則した役割分担が比較的順調に機能したのが、入植の第一、二期である。この間、外国人入植者の到来、ウクライナ人、ロシア人の国内移住等にささえられた北部入植地の人口増はめざましい。一方、南部のザポロージェ・カザークは、一七三五—三九年のロシア・トルコ戦争への従軍をはじめ、クリミヤ汗国、トルコに対する軍事的前哨としてのつとめを、よくはたした。

つまり、ザポロージェ・カザークは、自分たちの支配領域を蚕食しながら拡大された憎い北部入植地を守る役割を演じるはめになったのであるが、これは彼らにとり悪い結果ばかりをもたらしたわけではない。ロシア政府は、その代償として他のカザークに比べてより大きな自由の余地を、ザポロージェ・カザークに認めたのであるから。この点、北部入植地をカザークの自由に対する侵害の代名詞として弾劾するばかりの従来の理解は、いささか一面的にすぎるといわざるをえない。一八世紀のザポロージェ・カザークは、北部入植地の拡大という事実があったにもかかわらず、自由を保ったのではない。北部入植地があったからこそ、ロシア政府は、他のカザークに対してとったような恣意な統制策を手控えたのではないか。

ところが、入植の第三期、とりわけ一七六〇年代末からは、こうした南ウクライナの南北の役割分担が、うまく機能しなくなる。北部入植地の不満分子とザポロージェ・カザークとの結びつきが前景にあらわれてきた。それにともない、北部入植地とザポロージェ・カザークの関係も、あまりうまくいっていないが、国家の論理に則した役割分担から民の論理による一種の相互補完ともいべきものにかわっていく。

北部入植地において社会的不満をいだいた人々に対し、ザポロージェはかっこうの逃亡先、避難所を提供した。一七六

○年代末より北部入植地からザポロージエへの大量の人口移動が生じた結果、人口増のペースも後者の優位へと逆転をみる。また、槍騎兵の反乱とガイダマク運動の連動に代表されるような、社会的プロテストに際しての入植地住民とカザークとの連帯も強化される。一方、ザポロージエ・カザークの側からしても、北部入植地からザポロージエへ移住してきた人々の農業用労働力としての意義は非常に大きなものであった。彼らの力をかりることににより、カザークは長くロシア帝国への従属の主因となっていた食糧の不足を解消するめどをつけられるようになったのであるから。かくして、ザポロージエは、北部入植地の人々に社会的不満のはけ口を、北部入植地はザポロージエに農業用労働力、ひいては経済的自立の基盤を、互いに与えあうような関係が成立するにいたった。

一八世紀の北部入植地とザポロージエ・カザークを、南ウクライナ全体という相のもとにおいて見た場合、両者の関係は、ロシア国家の論理に則した役割分担から民の論理による相互補完的性格をおびた関係にかわっていく。ロシア国家にとって、こうした状況変化は見過ぎしにしておけるものではない。ロシア国家が、南ウクライナの農業植民地化をみずから主導下でおしすすめようとすれば、一七六〇年代末以降のザポロージエは「悪影響」をふりまく障害物に他ならなくなる。また、一七六八―七四年のロシア―トルコ戦争の勝利は、ザポロージエ・カザークを軍事的にほとんど無価値なものにした。その結果、ついに一七七五年、新セーチの廃絶という事態がもたらされたのである。

The Immigrant Societies under the *Qing* 清 Dynasty

—An Introductory Study of the *Bailian-jiao*
白蓮教 Sect Rebellion in the *Jiaqing* 嘉慶 Period—

by

Masaru Yamada

From the end of the 17th century to the end of the 18th century, there were many people exuded as immigrants from some advanced provinces, with *Hukuang* 湖廣 as their center, to the boundary region among *Sichuan* 四川, *Hubei* 湖北, and *Shanxi* 陝西. In this region the *Bailian-jiao* sect rebellion broke out and it is generally considered that this rebel army was composed of the immigrants. In this paper, the author tries to make clear the process of organizing the immigrant societies and the social problems causing the rebellion.

The immigrant societies which were at first composed of some associations from the same province, came to be reorganized by kinship. By the end of the *Qianlung* 乾隆 period some large landowners became powerful and monopolized the channels of economic circulation in the plain. And they tried to organize the family relations into the *Zongzu* 宗族 system. On the other hand, the mountaineers under pressure came to crisis of losing their own family relations. These conditions prepared for the large social change in the first year of the *Jiaqing* period.

The Settlement of the Southern Ukraine and the Zaporozhian New Sich

by

Hitoshi Nakamura

The subject of the present article is the colonization of the Southern Ukraine during the Zaporozhian New Sich period. The eighteenth-century Southern Ukraine was composed of two parts. One is northern

region in which the colonization movement developed with great intensity. The other, southern region, is the Zaporozhian Order's privileged territory called Vol'nosti.

The most remarkable fact that characterized the New Sich period, is incessant and increasing efforts made by the Russian authorities to expand the northern colony at the expense of the Zaporozhian Vol'nosti. This territorial encroachment inevitably caused ever-growing conflicts between the Zaporozhians and the Russian government. In this struggle, the Zaporozhians tried to reinforce their corps by means of attracting the settlers from the northern colony.

It is this flow of human capital into the Vol'nosti that made up the Russian authorities' mind to abolish the New Sich.